

— STEFANO JEFF BLUES —

AUREA FAMES

T E N T R A N S A C T I O N S F O R A V A N I S H I N G S O U L



消えていく魂のための十の取引

金の 飢え

アウレア・ファメスとは、富への渴望である。

金銭は、単なる富への願望ではなく、満たされることのない身体的な必要として描かれる。それは逆説的な飢えである。与えれば静まるどころか、いっそう増してゆく。こうして黄金は、完全さを約束しながら、たえず新たな欠落を生みつづける欲望の象徴となる。

LIBER NIGER

LEDGER OF ACCOUNT

ASSETS	+
MEMORIES	-
PROMISES	-
NAMES	-
REGRETS	+
INTEREST	+
BALANCE	∞



『Aurea Fames』は、あらゆるものに経済的な価値を与えようとし、ついには同じ原理を自分自身の存在にまで当てはめてしまう男の、ゆるやかな変容を語る。主人公は「会計士」と呼ばれる。

アルバム全体は、ほとんど人けのない金融都市のなかの、たった一夜のうちに起こる。会計士は夜明けまでに最後の取引を成立させる機会を与えられる。計り知れない富をもたらす取引である。

ただし、それを完了させるには十の承認が必要となる。

その一つ一つが、ひとつの放棄にあたる。

はじめ、それらの譲渡は形式にすぎないように見える。だが次第に、引き渡されるものは物質の世界だけのものではなくなる。会計士は自分の時間を、愛情を、記憶を、声を、顔を、そして最後には名前を差し出していく。

十の楽曲は、連続する十の取引であり、同時に
一個人が消えていく十の段階でもある。

このアルバムの中心にある逆説は、主人公が金
銭のなかに自由を求めながら、新たに得るもの
のたびに、所有するものへの依存を深めていく
ことである。

夜の終わりに、彼の経済的な収支は完全な黒
字である。

しかし人間としての収支は、計算することが
できない。

夜明けが訪れるとき、会計士は望んだすべてを
手にしている。だが誰のために、どんな理由で
豊かになりたかったのか、もう思い出せない。

譲渡

時間	-
愛情	-
記憶	-
声	-
顔	-
名前	-



変容

『Aurea Fames』は会計士の変容を語る。あらゆるものに測りうる価値があるという確信から出発し、やがて同じ論理を自分自身の生に当てはめるようになる男の物語である。彼の富への飢えは、実のところ内面の空虚と、認められたいという必要から生まれている。得るものはいずれも彼を満たさず、新たな欠落を生む。記憶、愛情、関係、時間は次々に評価され差し出される財となり、ついには所有するものと自分そのものの区別がつかなくなる。金銭による自由の探求はこうして依存へと変わる。蓄えるほどに、得たものを守り増やさねばならないからだ。会計士は自分が失いつつあるものを理解しながら、それでも進むことを選び、自らの崩壊に責任を負う。あらゆる利益の背後には、果たされなかった約束、見捨てられた人々、失われた時間、数字に変えられた感情からなる見えない負債が積み上がっていく。最後の逆説は、自分の価値を証明しようとして、主人公がまさに自分に人間としての価値を与えていたものを犠牲にすることだ。金の飢えは、いかなる富によっても本当に静めることのできない、承認と同一性と意味への飢えであることが明らかになる。



取引

十の声・一夜

-
- I THE VALUE OF THINGS・物の価値
-
- II COMPOUND INTEREST・複利
-
- III THE THIRTEENTH HOUR・十三時間目
-
- IV GOLDEN HANDS・金の手
-
- V INVENTORY OF AFFECTIONS・愛情の棚卸し
-
- VI INVISIBLE DEBT・見えない負債
-
- VII SELLING YOUR NAME・自分の名を売る
-
- VIII THE EMPTY VAULT・空の金庫
-
- IX BALANCE OF THE SOUL・魂の残高
-
- X DAWN AT CLOSED TRADING・取引終了の夜明け
-





THE VALUE OF THINGS

物の価値

夜の都市で、会計士は顔のない硬貨を見つめ、あらゆるものに値がつきうることを理解する。それから人々を見て、新たな問いを立てる。人間はいくらの値になるのか。



COMPOUND INTEREST

複利

最初の利益が次の利益を生み、さらに次を生む。会計士は成長の陶醉を知る。足るを得ることでは足りない。いま立ち止まることは、すでに損失に思える。



THE THIRTEENTH HOUR

十三時間目

金銭でほとんど何でも買える、と会計士は考える。ならば時間も買えるだろう。こうして十三時間目を買取ろうとするが、得た一分ごとに生そのものが差し引かれていることに気づかない。





GOLDEN HANDS

金の手

彼が触れるものはみな値を上げ、そして見えない何かを失う。家は資産になり、贈り物は投資になり、人は取引先になる。その手は黄金を生むが、もう温もりを与えられない。



INVENTORY OF AFFECTIONS

愛情の棚卸し

会計士は帳簿を開き、愛する人々を書き入れる。一人ごとに危険度と費用と利回りを割り当てる。名は数字となり、記憶までもが数値に変えられていく。



INVISIBLE DEBT

見えない負債

元帳には、書いた覚えのない勘定が現れる。果たされなかった約束、忘れられた人々、失われた日々。どんな金額もそれを消せない。富では返せない負債である。



73 08



SELLING YOUR NAME

自分の名を売る

立ち止まる最後の機会が与えられるが、会計士は署名を選ぶ。こんどの代価は彼の名である。署名のあと、もう誰も彼を呼べない。男は名を失う。



THE EMPTY VAULT

空の金庫

ついに約束された金庫に至る。開けても金はなく、あるのは次の部屋と、もう一つの金庫だけである。そこで彼は、虚無のまわりに果てのない要塞を築いてきたことを知る。

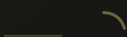




BALANCE OF THE SOUL

魂の残高

決算の時である。一方には手に入れたすべて、他方にはもう思い出せないもの。結果は完璧だが、それを享受すべき男はもう存在しない。



DAWN AT CLOSED TRADING

取引終了の夜明け

夜明けに市場は沈黙する。会計士は顔のない硬貨を再び見つけるが、その表面に自分の面立ちを認める。誰かがそれを拾い上げ、循環はまた始まろうとしている。

「誰も買わないとき、人間はいくらの値になるのか。」

象徴

顔のない硬貨

同一性から切り離された価値を表す。物語のなかで次第に会計士の面立ちを帯び、最後の啓示にいたる。

十三時間の時計

存在しない時間までも利益に変えようとする試みを表す。十三時間目とは、男が買えると信じている時間である。

黒い元帳

富と人間的な喪失を同時に記録する。経済上の記帳は見えるが、道德上の記帳は手遅れになるまで隠れている。

灯のともる窓

暗い都市にただひとつ灯る窓。はじめは野心と忍耐の象徴に見える。やがて金庫の姿を帯びていく。

金の手

物の経済的な価値を高めながら、同時にその情の価値を壊してしまう力を表す。

黒い水

主人公の沈んだ良心である。硝子や水たまり、反射のなかに現れ、取引の理性的な表面の下で存在しつづける。



肝心なのは、自覚がそのまま救いを生むわけではないということだ。

会計士は終わりの前に何が起きているかを理解し、それでも歩みを止めない。

その選択が、彼の転落を、受けた刑罰ではなく自らの責任にする。



すべてが買えるのなら、すでに自分を売った者はいくらになるのか。

音楽 STEFANO JEFF BLUES

© 2026 STEFANO JEFF BLUES. ALL RIGHTS RESERVED.